

長柄町金堀遺跡

—地域自主戦略交付金(交安)委託(埋蔵文化財調査)—

平成24年9月

千葉県

公益財団法人 千葉県教育振興財団

なが ばら かな ぼり 長 柄 町 金 堀 遺 跡

—地域自主戦略交付金(交安)委託(埋蔵文化財調査)—



序 文

公益財団法人千葉県教育振興財団（文化財センター）は、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを目的として昭和49年に設立されて以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県教育振興財団調査報告第689集として、千葉県が地域自主戦略交付金（交安）委託（埋蔵文化財調査）に伴って実施した長柄町金堀遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、古墳時代の集落跡の一部が検出され、この地域の歴史を知るうえで多くの貴重な成果が得られています。

刊行に当たり、この報告書が学術資料として、また埋蔵文化財の保護に対する理解を深めるための資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々をはじめとする関係の皆様や関係機関、また発掘から整理までご苦勞をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成24年9月

公益財団法人 千葉県教育振興財団
理 事 長 渡 邊 清 秋

凡 例

- 1 本書は、千葉県土木部による地域自主戦略交付金（交安）委託（埋蔵文化財調査）に伴う発掘調査報告書である。
- 2 本書に収録した遺跡は、長生郡長柄町鶴谷1528-7に所在する金堀遺跡（遺跡コード426-007）である。
- 3 発掘調査から報告書作成に至る業務は、千葉県土木部の委託を受け、財団法人千葉県教育振興財団（平成24年4月1日からは公益財団法人千葉県教育振興財団に変更）が実施した。
- 4 発掘調査及び整理作業の組織・担当者及び期間は以下の通りである。

発掘調査 調査研究部長 及川淳一、中央調査事務所長 白井久美子
調査期間 平成24年1月16日～平成24年1月31日
調査担当者 上席研究員 鶴澤正則

整理作業 調査研究部長 関口達彦、調査2課長 橋本勝雄
整理期間 平成24年5月1日～平成24年5月31日
整理担当者 主任上席文化財主事 加藤正信
- 5 本書の執筆は、主任上席文化財主事 加藤正信が行った。
- 6 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁教育振興部文化財課、千葉県土木部長生土木事務所、長柄町教育委員会ほか多くの方々から御指導・御協力を得た。
- 7 本書で使用した地形図は以下のとおりである。

第1図 国土地理院発行 1:25,000地形図「海土有木」(NI-54-19-16-1)（平成17年発行）
1:25,000地形図「鶴舞」(NI-54-19-16-2)（平成17年発行）

第2図 長柄町発行 長柄町地形図No.21 (1:2,500) (IX-ME 19-1)（平成6年発行）を縮小編集
（座標系は日本座標系表示）
- 8 本書で使用した図面の方位はすべて座標北である。座標系は、使用した地形図等により日本測地系と世界測地系が混合するが、基本を世界測地系とし図毎に表示した。
- 9 図版1の航空写真は、平成24年に撮影された京葉測量株式会社の写真を使用した。
- 10 本書に使用した遺構等の番号は、原則として調査時に使用したものをそのまま踏襲した。
- 11 挿図中で、土器実測図において須恵器は断面を黒く塗りつぶし、赤彩土器は赤彩部分を赤色で表現した。

本文目次

第1章 はじめに	1
第1節 調査の概要	1
1 調査の経緯	1
2 調査方法と経過	1
第2節 遺跡の位置と環境	1
1 遺跡の位置と周辺地形	1
2 金堀遺跡と周辺の遺跡	5
第2章 検出した遺構と遺物	8
第1節 古墳時代	8
1 竪穴住居跡	8
第2節 その他の時代の遺構・グリッド出土遺物	10
1 溝・道路状遺構	10
2 グリッド出土遺物	11
第3章 まとめ	14
報告書抄録	巻末

挿図目次

第1図 遺跡位置・周辺遺跡図 (1:25,000)	2	第5図 SI-002	9
第2図 周辺地形図 (1:5,000)	4	第6図 SD-001・SD-002	11
第3図 遺跡全体図・断面図	7	第7図 グリッド出土遺物	12
第4図 SI-001	9		

図版目次

図版 1 遺跡周辺航空写真 (縮尺約1:10,000)			
図版 2 調査前近景(北西より)・調査区近景(南東より)・調査区全景(北西より)・調査区全景(南東より)・調査区南側セクション(A-A)・調査区南側セクション(SI-001付近)・SI-002セクション・SI-001全景			
図版 3 SI-001-002(東より)・SI-001-002(西より)・SI-001-002(西より)・遠景(南東より)・SD-001全景(西より)・SD-002全景(西より)・SD-001セクション(南より)			
図版 4 出土遺物写真(SI-001・SI-002・SD-002・グリッド出土)			

第1章 はじめに

第1節 調査の概要

1 調査の経緯

本調査は、千葉県による地域自主戦略交付金（交安）委託（埋蔵文化財調査）事業に伴い実施された県道長柄大多喜線の道路改良工事に伴い調査された遺跡である。原状の県道の拡幅にあたる道路改良工事のため遺跡の保存については、原状保存は不可能で記録保存の方法をとることになった。記録保存に当たっては、公益財団法人千葉県教育振興財団（平成24年度から）が委託を受け、平成23年度に発掘調査を実施し、平成24年度に整理作業を行い成果を報告書としてここに刊行することとなった。

今回報告する金堀遺跡は、千葉県教育委員会発行「千葉県埋蔵文化財分布図(3)―千葉市・市原市・長生地区（改訂版）―」に掲載された周知の遺跡で、平安時代の土師器の包蔵地として知られる。今回の調査では県道の拡幅部分の狭隘な115㎡の調査区から古墳時代の竪穴住居跡2軒、奈良・平安時代の溝1条、奈良・平安時代以降の道路状遺構1条が検出された。

2 調査方法と経過

発掘調査は、表土を遺物検出層上面まで重機によって全面除去し検出された遺構の調査を主体に行った。その結果、古墳時代の竪穴住居跡2軒、奈良・平安時代の溝1条、奈良・平安時代以降の道路状遺構1条を検出した。包含層からの出土遺物は、調査区グリッドに従い取り上げを行った。検出された遺構に対しては精査を行いその構造や出土遺物の調査を行った。これら上層遺構の調査に対し、旧石器時代の下層調査については、調査区全体に関東ローム層が遺存しないため調査の必要はないと判断された。

発掘調査は下記のとおり実施した。

組 織 調査研究部長 及川淳一 中央調査事務所長 白井久美子

担当者 上席研究員 鶴澤正則

内 容 本調査 115㎡（上層）

調査期間 平成24年1月16日から1月31日

整理作業は下記のとおり実施した。

組 織 調査研究部長 関口達彦 調査2課長 橋本勝雄

担当者 主任上席文化財主事 加藤正信

実施期間 平成24年5月1日から5月31日

第2節 遺跡の位置と環境

1 遺跡の位置と周辺地形（第1・2図，図版1）

金堀遺跡は、長生郡長柄町鶴谷に位置し太平洋に注ぐ一宮川のほぼ上流域といった地点に位置する。一宮川は、九十九里の海岸平野を経て太平洋に注ぐ小河川で、河口から遡上すると海岸平野で高低差のない地点を盛んに屈曲し、丘陵に入り込むとさらに深く河道を浸食し、小規模な河岸段丘を形成する。平坦地では堆積地を構成し、分水嶺近く迫り源流となる。分水嶺は東京湾と太平洋とを分ける標高100m前後の房総丘陵が南北方向に連なる。水流によって段丘面から深く浸食され、河道には大きな段差（3m～5m

程度)が形成されている。この段差のために人々の流水への接触は非常に困難となっており、河川水の利用には困難がつきまといつていた。その一方で丘陵部からは豊富な湧水が噴出したため、この湧水を利用した小規模な溜め池が数多く作られ灌漑に用いられていた。

遺跡全体は道路拡張区のため細長く、西側が高く調査区東側に向かって緩やかな傾斜を示している。標高は約19mを測る。調査区北側は県道を挟み間近に一宮川が流れ、南側には伏隠な水田が入り込む谷津田の開口部に遺跡は位置する。

調査区では北側前面に一宮川の小規模な沖積平地が広がり南側の丘陵端部に近い地点を一宮川本流が流れ、北端の丘陵際にはやや下流で分岐した小支流が流れている。

- 1.金堀遺跡
- 2.海老ヶ谷Ⅲ遺跡
- 3.宮ノ台城跡
- 4.宮ノ台横穴
- 5.宮ノ下遺跡
- 6.金井戸遺跡
- 7.海老ヶ谷Ⅰ遺跡
- 8.海老ヶ谷Ⅱ遺跡
- 9.永町遺跡
- 10.乱塔場遺跡
- 11.川間東遺跡
- 12.川間西遺跡
- 13.市行遺跡
- 14.要害古墳群
- 15.丹覚寺裏横穴
- 16.要害城跡
- 17.要害遺跡
- 18.史跡長柄横穴群
- 19.徳増下谷横穴群
- 20.ヲバガへ遺跡
- 21.年切遺跡
- 22.伯母ヶ谷遺跡
- 23.徳増下谷遺跡
- 24.針ヶ谷遺跡
- 25.下久保遺跡
- 26.堀口遺跡
- 27.御嶽道遺跡
- 28.御嶽道前遺跡
- 29.飯尾遺跡
- 30.中島前遺跡
- 31.追戸遺跡
- 32.久保和久谷遺跡
- 33.初ヶ谷遺跡
- 34.大和久遺跡
- 35.中島横穴群
- 36.清水前遺跡
- 37.吉田谷遺跡
- 38.谷ノ谷遺跡
- 39.黒ヶ谷遺跡
- 40.寺谷横穴群
- 41.瀬戸南遺跡
- 42.中谷遺跡
- 43.立島城跡
- 44.権現森遺跡
- 45.上ノ代遺跡
- 46.柳作古墳・柳作塚群
- 47.針ヶ谷長房滝谷横穴群
- 48.堀田遺跡
- 49.高田遺跡
- 50.関谷遺跡
- 51.瀬津根遺跡
- 52.針ヶ谷東谷横穴群
- 53.山根・喜多谷横穴
- 54.桜谷・谷ヶ谷横穴群
- 55.大正寺裏横穴群
- 56.桜谷・笠松等横穴群
- 57.間ヶ谷横穴
- 58.辻谷遺跡
- 59.桜谷・辻谷(追越)横穴群
- 60.力丸・関屋横穴群
- 61.狸谷砦跡
- 62.鍛冶ヶ作塚
- 63.鍛冶ヶ作遺跡
- 64.立町塚
- 65.内合遺跡
- 66.金谷・高山横穴群
- 67.道畑遺跡
- 68.芝付遺跡
- 69.吹原遺跡
- 70.立島・汲井谷横穴群
- 71.町田遺跡
- 72.町田塚
- 73.切通前遺跡
- 74.戸正遺跡
- 75.汲井遺跡
- 76.豊作遺跡
- 77.瀬戸遺跡
- 78.鶴谷西部Ⅰ横穴群
- 79.鶴谷西部Ⅱ横穴群
- 80.一千町遺跡
- 81.谷口遺跡
- 82.東遺跡
- 83.前田北遺跡
- 84.前田南遺跡
- 85.関下遺跡
- 86.坂通遺跡
- 87.中原田北遺跡
- 88.立島・斎藤ヶ谷横穴群
- 89.堂下遺跡
- 90.花建遺跡
- 91.下谷Ⅰ遺跡
- 92.下谷Ⅱ遺跡
- 93.四反目遺跡
- 94.供養塚遺跡
- 95.鶴谷鶴舞遺跡
- 96.吹丸遺跡
- 97.万作横穴群
- 98.中間横穴群
- 99.中間遺跡
- 100.下山ノ谷横穴
- 101.中原田遺跡
- 102.道祖神遺跡
- 103.鶴谷老ノ崎遺跡
- 104.鶴谷久保向遺跡
- 105.谷田部田横穴
- 106.宮下横穴群
- 107.鶴谷東部Ⅰ横穴群
- 108.鶴谷東部Ⅱ横穴群
- 109.道而遺跡
- 110.下小和田遺跡
- 111.阿波河神社遺跡
- 112.国府岡遺跡
- 113.殿谷城跡
- 114.山崎横穴群
- 115.榎本・太平台泉谷横穴群
- 116.榎本垣ヶ谷横穴群
- 117.榎本和合横穴群
- 118.柿谷遺跡
- 119.榎本城
- 120.榎本遺跡
- 121.打手遺跡
- 122.岩川遺跡
- 123.上田仲遺跡
- 124.実法遺跡
- 125.本台宮の下遺跡
- 126.本台城跡
- 127.今泉遺跡
- 128.今泉城跡
- 129.今泉宮ノ下遺跡
- 130.小谷A横穴群
- 131.小谷B横穴群
- 132.大谷横穴群
- 133.塚向横穴群
- 134.米満横穴群
- 135.豊榮館跡
- 136.三川谷横穴群
- 137.吹羅横穴群
- 138.関原砦跡
- 139.井山横穴群
- 140.長南城跡
- 141.深沢横穴群
- 142.大関谷横穴群
- 143.三途台A横穴群
- 144.三途台B横穴群
- 145.木椎谷横穴
- 146.添作谷横穴・七つやぐら横穴
- 147.桜木下横穴・殿ヶ谷横穴・長照寺裏横穴・西見田横穴・ホトイド横穴・集会所裏横穴・垣添横穴・馬場谷横穴
- 148.和合谷横穴
- 149.棚毛砦跡
- 150.小平田横穴・三本松横穴・水ノ口横穴・中ノ郷横穴
- 151.添作遺跡
- 152.牡丹ヶ谷遺跡
- 153.塚越遺跡
- 154.又富久保田遺跡
- 155.広町遺跡
- 156.龍見寺遺跡
- 157.千田城跡
- 158.池谷遺跡
- 159.千手堂城跡
- 160.寺前遺跡
- 161.高田脇谷横穴
- 162.高山横穴群
- 163.松ノ木横穴
- 164.寺前横穴群
- 165.節ヶ谷横穴群
- 166.須合横穴
- 167.近江谷横穴
- 168.高山城跡
- 169.力丸横穴群
- 170.榎本年切横穴群



X-635

X-635

X-640

X-640

宮川

第2図 周辺地形図 (1:5,000)

0 1:5,000 200m

座標は日本座標系

2 金堀遺跡と周辺の遺跡（第1図、図版1）

金堀遺跡は、古墳時代後期の竪穴住居跡や奈良・平安時代の遺物が検出された。古墳時代後期から奈良・平安時代にわたる遺跡であるが、この時期は居住域の拡大・土地利用の活発化が進んだ時期と重なっている。集落の拡大化・内陸部への展開に代表される遺跡数の増加の現れとして本遺跡の位置づけが出来る。

本遺跡に隣接する海老ヶ谷Ⅲ遺跡²⁾は、本遺跡と同様に一宮川の河岸段丘上に位置し千葉県の遺跡分布地図では奈良・平安時代の土師器・須恵器の包蔵地とされており、平成15年にきわめて小規模ながら確認調査が行われ、本遺跡と同様な遺跡の立地条件により類似の傾向がうかがえる。丘陵に続く段丘面の一部の調査で、原状水田の地区で水田跡・畦畔・溝が検出され、奈良・平安時代の土師器・須恵器が検出されている。概要によると、水田は近世以降の現代に続く水田とみられ、遺物は丘陵部からの流入品とみられるとされており、丘陵部には金堀遺跡と同様な段丘面上の集落が展開しその遺物の一部が斜面下に流入したものとみている³⁾。

旧石器時代の遺跡は、周辺にはほとんど知られていない。東京湾と太平洋との分水嶺にあたる西方の比較的広大な丘陵平坦部には遺物の出土する遺跡が知られるが（長柄町高西谷遺跡・長柄町美佐子台遺跡・下久保遺跡ほか³⁾）、本遺跡周辺の丘陵上は、尾根幅の非常に狭い痩せ尾根で旧石器時代の遺物等の検出はない。

縄文時代についても、旧石器時代に続く草創期・早期の遺跡は、遺跡の立地傾向から旧石器時代の遺跡と同様に非常に少ない。また、縄文時代の一般的集落が構築されるような台地上の平坦地が少なく、東京湾側の台地上に数多く存在する貝塚を伴うような内湾性の大規模集落のような例は少なく、狭い丘陵上の小規模な集落や包蔵地が散見されるのと、河川流域の堆積地上微高地の遺跡がみられその様相は東京湾側とは異なる。集落の発展・展開が容易には行えなかった状況がうかがえる。

弥生時代も、本遺跡の位置する小河川の上流域には遺跡は少なく、河川の下流域で沖積平野が展開するようになると遺跡が見られるようになる。距離的に比較的近い長南町今泉遺跡(127)では弥生時代中・後期の集落の一部が調査されており⁴⁾、沖積地に面した微高地や比較的平坦な丘陵上に集落が営まれるようになる。

古墳時代は、前期には弥生時代からの集落と同様な構成条件が当てはまるとみられ、弥生時代から古墳時代にかけての集落が存在する。中期以降は本格的な竪穴住居跡の集落が大きく展開する時期と考えられるが、遺跡が展開するような広大な台地上の平坦地は少なく周辺遺跡の調査例が少ない。狭い微高地・丘陵上の平坦地などに遺跡が展開する例が見られる。茂原市の国府岡遺跡(112)では水田の圃場整備に伴う調査の際に⁵⁾、低湿地遺跡として自然流路からの大量の木製品・木材を始め多数の遺物が検出され、通常の遺跡では遺存しにくい木製の道具の一端が知られるようになった。中でも古墳時代の琴の胴板が検出され二弦の構造とみられ、埴輪の琴を彷彿とさせるものであった。

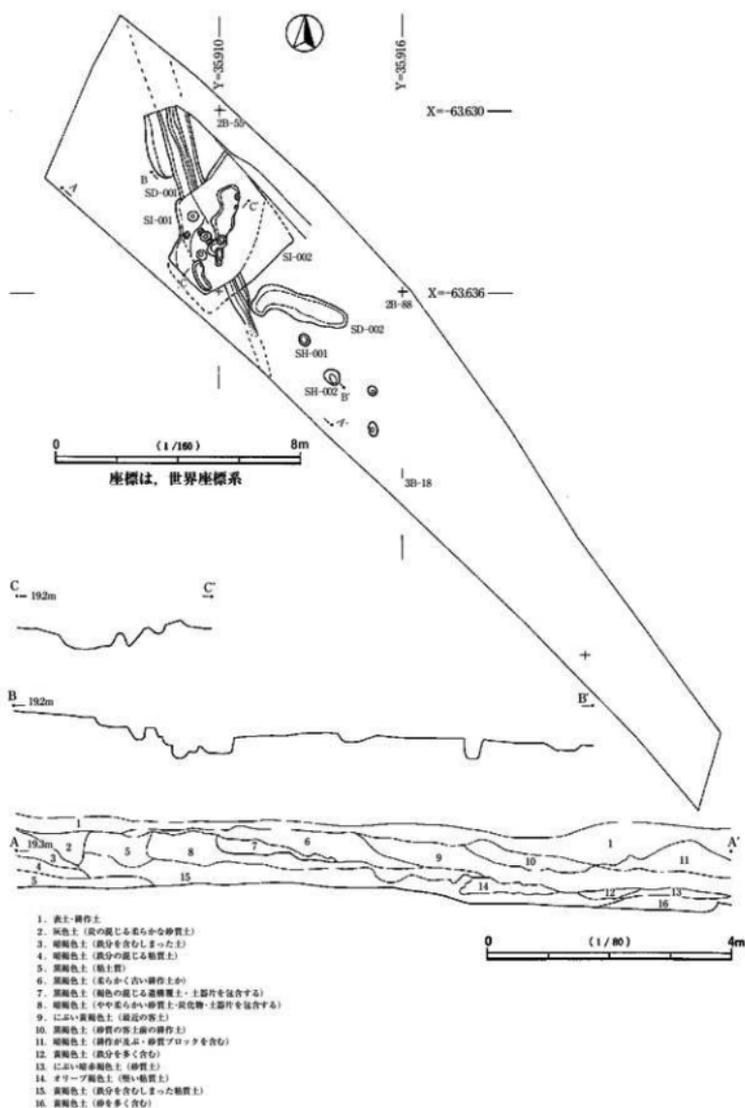
長生地方では、古墳時代後期の横穴群が非常に特徴的である。概期の墳墓の普遍的な形態は、墳丘を持つ高塚古墳に代表されるが、長生地域では横穴墓が主体である。丘陵を構成する軟質の凝灰質砂岩・泥岩層からなる崖面に横穴を穿つ横穴墓は、千葉県内で4,129基を数えるが⁶⁾、その大部分は東・西上総地方に分布している。東上総では特徴的な構造を示し、遺体埋葬部の玄室がそこへ至る溪道との境界から大きな段差を持って高く構築される高壇式が多数を占めている。他地方ではこのような様式の横穴墓はほとんど見られない。この高壇式の横穴墓は、溪道の長さを短縮しても玄室との隔離性を確保する目的が主と

見られ、それらの横穴墓が多く分布するこの地域の中でも、特に長柄町では集中度が高く約330基を数え、主なものとして国の指定史跡となっている史跡長柄横穴群(18)(徳増支群)があげられる。約35基の横穴墓群の一部は整備され、ガイドンス施設も設けられている。それ以外の主要な横穴墓としては「千代丸・力丸横穴墓群」⁷⁾として調査・報告された長柄町大正寺裏横穴群(55)、力丸・関谷横穴群(60)、力丸横穴群(169)があり、このほかに長南町米満横穴群(134)があげられる。

奈良・平安時代も大規模な集落遺跡は見られないが、遺物を出土する遺跡は非常に多くなり、人間活動の展開が急激に広まり物資の流通が盛んになり、至る所に活動の痕跡が見られるようになる。本遺跡も台地上でも丘陵上でもない河岸段丘の平坦面の一部に竪穴住居が複数営まれ、小集落を構成していたとみられるが、このことは沖積地に面する居住域の展開・拡大が進んだ結果であろう。

中世には、丘陵がちな地形の特徴から多くの城館遺跡が作られたが、その多くはあまり知られずに所在している。ここでは長南武田氏の居城長南町の長南城跡(140)⁸⁾、中世館跡の長南町岩川遺跡(122)をあげられる。これらの遺跡の分布からは、丘陵上の城・砦跡、沖積微高地の館・屋敷跡などが構築され、中世末から近世を経て現代集落に至る集落の固定化の傾向がみられる。

- 注 1 千葉県教育委員会 『千葉県埋蔵文化財分布地図(3)-千葉県市・市原市・長生地区(改訂版)-』 1999
- 2 財総南文化財センター 『総南文化財センター年報 No.13 -平成13年度・14年度・15年度・16年度文化財センターの歩み-』 2004
- 3 財総南文化財センター 『サウザンドリープスゴルフクラブ』 1997
- 4 財長生郡市文化財センター 『岩川・今泉遺跡』 1990
- 5 財長生郡市文化財センター 『国府関遺跡(国府関遺跡、国府関東前遺跡)』 1993
- 6 千葉県教育委員会 『千葉県所在古墳詳細分布調査報告書』 1990
- 7 財長生郡市文化財センター 『千代丸・力丸横穴墓群』 1991
- 8 財長生郡市文化財センター 『長南城』 1991
- 長南町教育委員会 『千葉県長生郡長南町長南城跡確認調査報告書』 1993



第3図 遺跡全体図・断面図

第2章 検出した遺構と遺物

第1節 古墳時代

1 竪穴住居跡

調査区は、西から東に向かって緩やかに傾斜し、地表には客土・耕作土が何層かに堆積し数多くの造成の過程が窺われた。遺物を包含する層は何層か見られるが造成に伴うとみられるいわゆる動かされた土の中に多く見られた。調査区が狭いため、遺物包含層中の出土はグリッド毎に記録し取り上げ、検出した遺構の調査を重点にして調査を実施した。調査区西側には古墳時代の須恵器を含む掘り込みが検出され、竪穴住居跡を想定して調査し、掘り込み状況・形状の把握につとめた。掘り込みは2段階にわたり、西側の上段の掘り込みと、隣接する東側の下段の掘り込みを別の竪穴住居跡として調査を実施した。通常の竪穴住居跡の施設（カマド・炉・柱穴等）・形状が明瞭には確認できなかったが竪穴住居跡の掘り込みの一部として調査を実施し、SI-001・SI-002として調査した。これらの他に調査区の西側の土層断面の観察からは、別の遺構とみられる土層が観察されたが、調査区内での精査・平面観察によって遺構が確認できなかったため遺構としての調査は出来なかった。その他道路状の溝状遺構と短い溝が検出された。調査区東側は傾斜が急になり、地山の削平も見られ遺構等の掘り込みも検出されなかった。

SI-001（第4図、図版2・3・4）

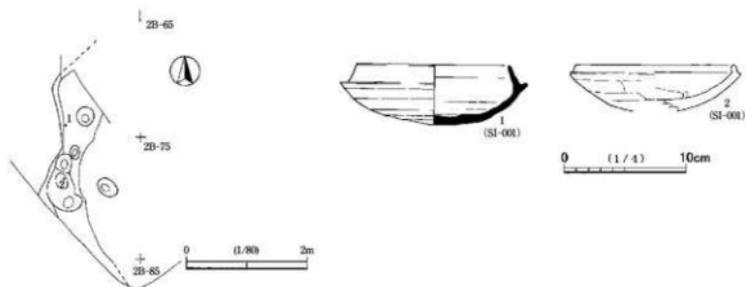
調査区の西側から検出された遺構で、隣接するSI-002と重複しSI-002の上面に構築された遺構とみられる。西側には床の延長の貼り床等の構造は遺存していなかった。SI-002との明瞭な新旧関係は把握できなかった。調査できた部分は、長さ約2.5m、幅は最大で約1mで、確認できた掘り込み深さは約0.1mと非常に浅かった。竪穴住居跡としての要素を大きく欠き、該期の通常形状とは異なり隅丸方形を呈せず、焼土を含む炉やカマドは検出されず、明瞭な主柱穴も検出できなかった。

掘り込みの形状は不整形で、ほぼ南北方向にくの字状に湾曲しながら東側へ約0.1m段差を持って掘り込まれる。底面も地山の軟質の砂質凝灰岩が露呈し貼り床等の状態は確認できなかった。床面にあたる幅1m弱の平坦面にはほぼ中央部分に長さ約1m、幅0.4m、深さ約0.2m～0.3mの深さの小ピットが3基掘り込まれるが主柱穴とは見られない。それ以外にも小ピットが単独で3基検出されたが、深さはおおよそ0.1m～0.2mと浅く規模も小さい。

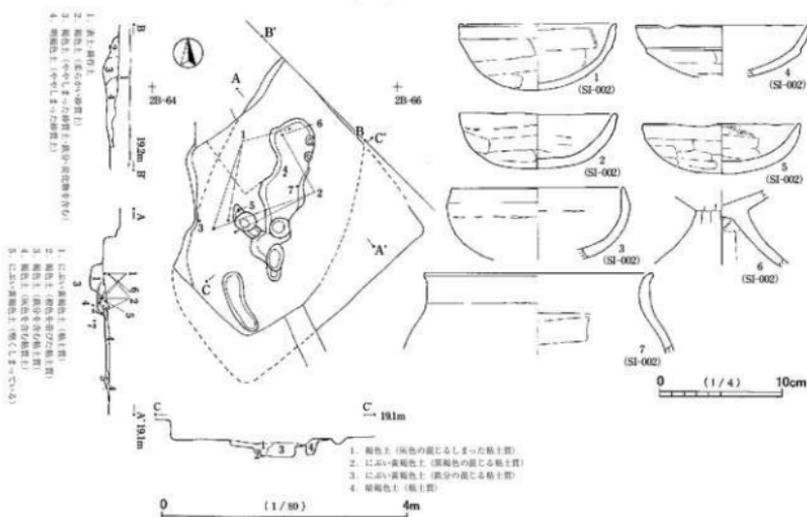
出土遺物は、遺構確認面より上部の包含層覆土からの出土がみられるが、掘り込みに伴う遺物は少なく、図示できるものは以下の2点である。1は須恵器の坏でほぼ完形である。口径12.4cm、器高4.9cmを測り、胎土はやや粗いものの焼成は良好である。2は土師器の坏で中央のピット群内出土である。約半分の遺存で口径は13.0cm、復元器高3.8cmを測り胎土は密で、焼成は良好である。

SI-002（第5図、図版2・3・4）

SI-001の東側に隣接する遺構で、全体的には遺構の遺存状態は不良でSI-001同様に、竪穴住居跡としての明瞭な施設（カマド・炉・柱穴等）は確認できていない。北西側の掘り込みは直線的ではなく通常の隅丸方形の形状ではないが、不整形の竪穴住居跡として認識・調査した。全体が把握できたわけではないが、北西側は段差を持って掘り込まれ、その先にはほぼ平坦な面が作られ、東側は途中から地山の傾斜によって掘り込みが消滅する。平坦面は楕円状に南北方向に延び長さ4m、幅1.2mほどの広がりとなっている。



第4図 SI-001



第5図 SI-002

平坦面の中央部分には溝状の掘り込みとピット群がみられるが支柱穴を構成するようなものではなく、小ピットといった規模のものである。溝状の掘り込みは南北方向に約2.5m、幅0.6m～0.8mの不整形の溝で南側に小ピットが3基みられる。溝の深さは床面から0.1m～0.3mと浅く不規則な掘り込みで、ピットの配置も規則性はないようにみられ、深さは0.2m～0.3mである。南東側の掘り込みは遺存せず、一部で床の平坦面が検出されたのみである。

出土遺物はSI-001より量は多く出土しており、平坦な床面とその中の溝状の掘り込みを中心に出土した。それらの中で7点が図示できた。時期は古墳時代後期のものとみられる。1～5は土師器の坏である。3は坏身の形状を呈する。1は口径12.8cm、器高は5.4cmを測るほぼ完形である。胎土は密で、焼成は良好である。2は口径12.8cm、器高4.5cmを測り遺存度は約3/4である。胎土は密で、焼成は良好、外面の

口縁近くには輪積みの接合痕が少し残る。器壁厚は最大で0.9cmある。3は、復元口径14.0cm、口縁部周辺の1/5程度が遺存し底部近くを欠く。胎土は密で、焼成は良好、外面の口縁近くに輪積み痕が一部残る。4は口径14.2cmを測り、底部を欠くが約半分を遺存する。外面には稜を持つ。5は口径12.8cm、器高4.1cmを測る。遺存度は良好で9/10遺存する。胎土は密で、焼成は良好だが器厚が厚く最大1.0cmある。6は土師器の高杯の脚部で遺存不良である。外面はほぼ直線的にくの字状に屈曲する。7は土師器の甕の口縁部で、遺存度は低く1/10程度である。復元口径18.6cm、現存高6.7cmを測る。

第2節 その他の時代の遺構・グリッド出土遺物

1 溝・道路状遺構

上記の堅穴住居跡2軒のほかに、住居跡を切って掘り込まれた道路状遺構と溝が検出された。SD-001は地山の西から東への自然傾斜に直交するように延び、底面の一部に硬化面を有し、溝を持つ道路状遺構とみられる。また、SI-002の南側に短い溝が検出されSD-002として調査した。

SD-001 (第6図、図版2・3)

調査区を北西から南東に向かって縦断するように延びる道路状遺構で、全長8m、最大幅1.6mを測る。本遺構は複数の溝が集合し、大きくは西側の平坦な段差状の溝と東側の2段に掘り込まれた溝とにわけられるが、全体としては先に述べた溝や硬化した路面を含む道路状遺構とみられる。

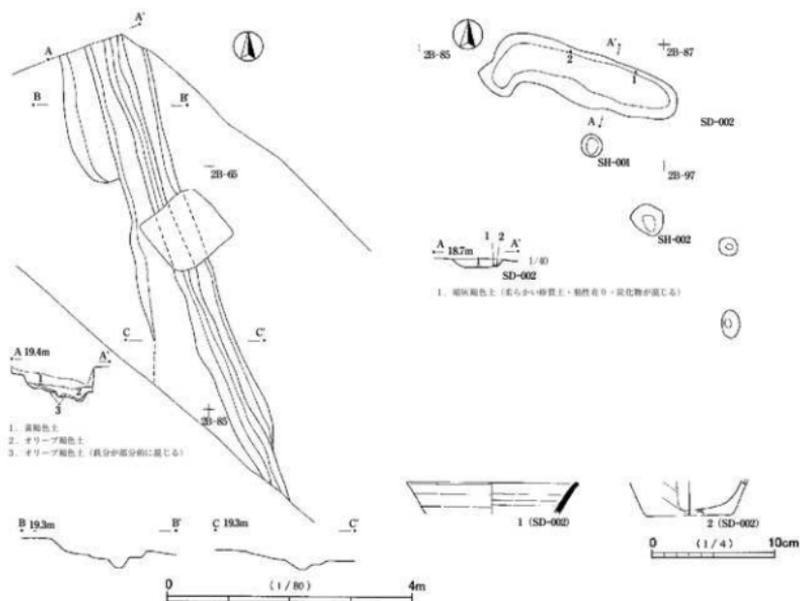
西側のものは、検出した長さ22m、幅0.8mを測り、西側の高い部分から緩やかに傾斜し平坦部へと至る。北側から現れて調査区途中で浅くなって消滅する。道路状遺構の山側の立ち上がり部分であろう。東に位置するものは西側のものからわずかに段差を持って傾斜し平坦面を構成しさらにその内側に幅約0.4mの溝を持つものである。底面には鉄分が沈着し硬化した面が見られ、道の路面となっている。調査区の北東側はすぐに一宮川の河道に至る崖面に近く段丘崖の縁を通る道であるとみられる。先述の古墳時代の堅穴住居跡を切って掘り込まれていることから、その時代以降であることは確かで、現在の道路（県道長柄大多喜線）と位置が近くほぼ平行に近い状況での検出であり、今回の調査区内では時期を決定できるような遺物の出土はなく時期不明であるが、奈良・平安時代以降の道路とみられる。

SD-002 (第6図、図版2・3・4)

SI-002の南側に位置する溝状遺構で、長さ3.0m、幅0.8mの溝である。深さは0.1m～0.2mと浅い。削平された遺構の残存という可能性もある。遺構の時期は、形状等からは窺えないが、出土遺物からは奈良・平安時代のものと思われる。

出土遺物は、2点図示できた。1は須恵器の杯の口縁部破片である。遺存は不良で2/10程度である。復元口径14.0cm、現存高2.6cmを測る。2は土師器の底部破片である。遺存度は3/10程度で、底径は7.0cmを測る。

さらに南側には小ピットが4基検出されている。深さは最深で0.35m、浅いもので0.1mを測る。図示出来るような遺物は出土していない。

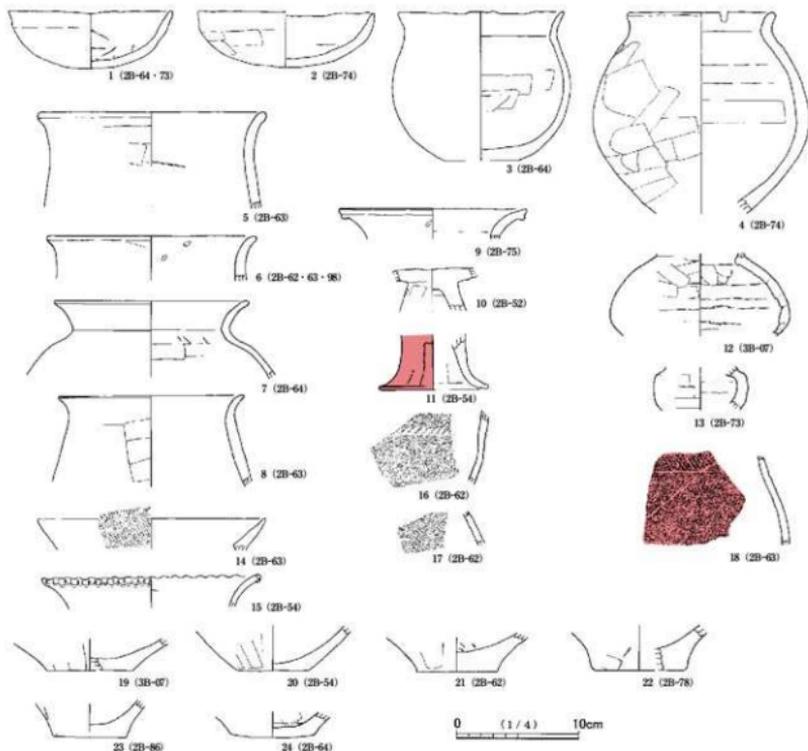


第6図 SD-001・SD-002

2 グリッド出土遺物 (第7図, 図版4)

遺構として検出できた地区以外からの出土遺物をグリッド出土遺物として掲載する。遺構として認識できたものは遺存状態も不良で形状・様相は不明確であった。遺物はそれ以外の範囲からも出土し、調査区周辺にはさらに遺構の所在する可能性が十分に窺われる。遺物の時期をみると古墳時代後期～奈良・平安時代のものが主であるが、わずかながら弥生時代～古墳時代前期にかけての遺物が検出され、古い集落の存在する可能性も窺われる。

グリッド出土遺物をここでは24点掲載する。1・2は土師器の坏である。1は口径13.4cm、器高4.7cmを測り、2は口径14.4cm、器高4.5cmを測る。遺存度は1は7/10、2は9/10と良好だが、共に器面はやや摩滅している。3・4は土師器の甕である。3は復元口径13.4cm、器高12.2cmで遺存度は4/10、器面はやや摩滅している。4は復元口径11.8cm、現存高16.5cm、遺存度3/10である。器厚は厚めで約1cm以上を測る。5・6・8は土師器の瓶若しくは長胴甕の口縁部付近の破片である。いずれも遺存度は悪く2/10程度である。5は復元口径18.6cm、現存高7.9cm、6は復元口径17.2cm、現存高3.6cm、8は復元口径15.2cm、現存高7.5cmを測る。いずれも器厚は厚めで1cm近くある。7は土師器の甕の口縁部で復元口径16.0cm、現存高6.3cmを測り、遺存度は3/10である。頸部がわずかにくびれ口縁部が大きく外反する。9は土師器の甕の口縁部で遺存度は悪く1/10、復元口径15.2cm、現存高2.5cmである。大きく外反する口縁部の外面には大きな突帯が張り出している。10は土師器の高坏の脚部の一部で、遺存度は悪く2/10程度



第7図 グリッド出土遺物

である。現存高3.4cmである。11は土師器の高坏の脚部で外面に赤彩がみられる。遺存度は悪く2/10程度。復元底径9.0cm。現存高4.5cmを測る。内外面共に上下方向のヘラケズリがされている。12・13は土師器の小型の土器類である。12は埴の胴部であろう。遺存度は悪く3/10程度である。復元最大径14.8cm。現存高6.7cmを測り、胴部の最大径が中央よりやや下部に寄り算盤玉状の下ぶくれ形状を示す。内面は輪積み痕が大きく残り、上部から押さえつけている。口縁部との接合痕から上部を欠損する。古墳時代前期のものと思われる。13は輪積みで成形され、外面ヘラケズリがされる。いわゆる手捏ね土器ではなく小型土器の範疇に入ろうか。器厚は厚く約1cmを測る。埴の胴部とみられる。14・15は古墳時代前期の土師器の甕の口縁部である。14は口縁部の外面には縦方向の粗いハケメ、内面には横方向の粗いハケメが残る。復元口径18.6cm。現存高2.6cmを測り、遺存度は1/10以下である。15の甕は口唇部に指頭押さえの波状口縁となっている。復元口径は17.8cm。現存高3.1cmを測り、遺存度は1/10程度である。16～18は小破片で、16は弥生土器の鉢か土師器の碗の破片であろうか。外面に斜め方向のキザミが施される。器厚は薄く約0.5cmである。17は弥生時代後期～古墳時代前期にかけての土器の小破片である。外面上部に羽状

縄文が施される。小型の甕・壺の胴部の破片であろう。18は外面に赤彩が施される小型の壺若しくは甕の胴部上半の破片である。上部が横行沈線で区画され細い縄文が斜行する。器厚は薄めで約0.5cmである。弥生時代後期～古墳時代にかけてのものであろう。

19～24は底部の破片で、すべて土師器の底部とみられる。19は、底径7.0cmを測る。20は底径5.8cmを測る。21は底径6.6cm。器厚は厚く約1.5cmを測り、比較的大型の土器の底部であろう。22は復元底径7.2cm。器厚は厚く2cm近くある。23は底径6.0cm。比較的立ち上がりの急な胴部に続く。24は底径6.8cm。底面は平坦ではなく中央が高く周辺が削られ緩い弧状になっている。

第3章 まとめ

上記のように、本遺跡の調査区は狭く遺存状況も不良で、検出された遺構は古墳時代の竪穴住居跡2軒と奈良・平安時代の小規模な溝、それ以降の時期とみられる道路状遺構の検出にとどまった。包含層の遺物からは、弥生時代から古墳時代、奈良・平安時代のものがみられ周辺には該期の遺構の存在が窺われる。一宮川の上流域の低地に接する河岸段丘上の遺跡としては、集落の存在可能限界に近い今回の調査区は、集落の中心とは成り得ず遺構の立地限界といえる位置に所在している。検出した竪穴住居跡についても、通常の該期の遺構とは形状も大きく異なることから普遍的な住居というよりは、河道の段丘崖に近接する竪穴状遺構とみる方が適切かもしれない。

近隣の、海老ヶ谷Ⅲ遺跡の確認調査の際にも遺物の検出はあったものの該期の遺構の検出はなく、生活拠点の存在位置の把握が出来なかった。集落を構成できるような広大な平坦地は少なく、生活の拠点集落がどこに所在するかということが求められるが、现阶段では明瞭な調査成果としての集落の所在は不明である。古墳時代後期になると、遺跡の周辺地域は特徴的な墳墓形態である高壇式横穴墓群の集中する地域となり、それらの横穴墓群の構成集団の居住域と墓域との位置関係を求めるのが課題の一つであるが、その回答を得られるような集落遺跡も検出・調査されていない。

写真図版





調査前近景 (北西より)



調査区近景 (南東より)



調査区全景 (北西より)



調査区全景 (南東より)



調査区南側セクション (A-A)



調査区南側セクション (SI-001 付近)



SI-002 セクション



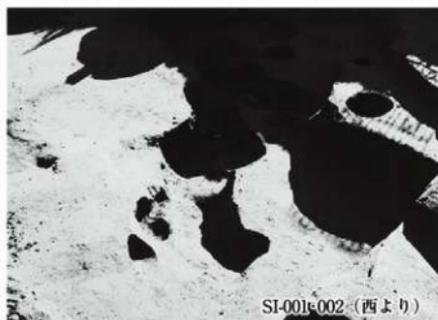
SI-001 全景



SI-001-002 (東より)



SI-001-002 (西より)



SI-001-002 (西より)



SI-001-002 遠景 (南東より)



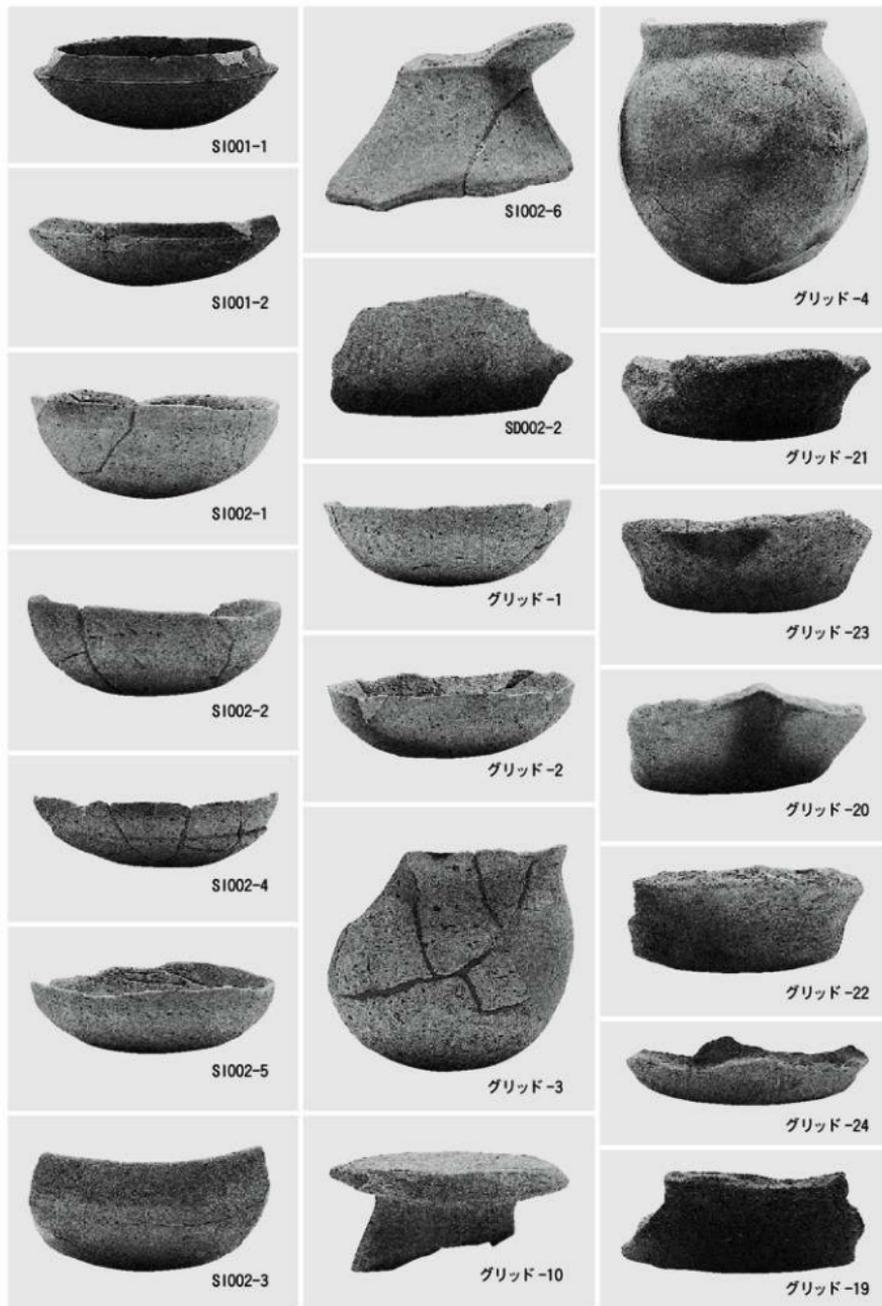
SD-001 全景 (西より)



SD-002 全景 (西より)



SD-001 セグション (北より)



報告書抄録

ふりがな	ながらまちなほりいせき							
書名	長柄町金堀遺跡							
副書名	地域自主戦略交付金（交安）委託（埋蔵文化財調査）							
巻次								
シリーズ名	千葉県教育振興財団調査報告							
シリーズ番号	第689集							
編著者名	加藤正信							
編集機関	公益財団法人 千葉県教育振興財団 文化財センター							
所在地	〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809番地の2 Tel 043-424-4848							
発行年月日	西暦 2012年9月28日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡	所在地	市町村	遺跡番号	世界測地系				
かほり 金堀遺跡	ながらまちなほり 長柄町錫谷1528-7	12426	007	35度 25分 32秒	140度 13分 43秒	20120116～ 20120131	115㎡	道路建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
金堀遺跡	集落跡	古墳時代	竪穴住居跡2軒	土師器（甕・坏・高坏・埴）、 須恵器（坏）				
		奈良・平安時代	溝 1条	土師器（甕）、須恵器（坏）				
		奈良・平安時代以降	道路状遺構1条					
要約	一宮川上流の河岸段丘に位置し、古墳時代の竪穴住居跡2軒と奈良・平安時代の溝1条、奈良・平安時代以降の道路状遺構1条が検出された。近接の遺跡からも奈良・平安時代の遺物が比較的多く検出されており、この地域の段丘上平坦面は、集落地として利用されていたとみられる。遺構は緩斜面のため一部が削平されて消滅している。出土遺物に、弥生時代後期～古墳時代、古墳時代後期、奈良・平安時代の遺物が見られることから、河川の氾濫原に面した段丘上の平坦面には長期間にわたり集落が営まれてきたことが窺える。							

千葉県教育振興財団調査報告第689集

長柄町金堀遺跡

——地域自主戦略交付金(交安)委託(埋蔵文化財調査)——

平成24年9月28日発行

編 集	公益財団法人 千葉県教育振興財団 文化財センター
発 行	千 葉 県 千葉市中央区市場町1-1 公益財団法人 千葉県教育振興財団 四街道市鹿渡809番地の2
印 刷	株式会社 豊 文 堂 茂原市早野1143
